

幻想郷の住人 → ONE
PIECE の世界へ

にやもし。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦闘による力の余波で生まれた時空の歪みで、

或いはある妖怪の能力で、

はたまた神の起こす奇跡で、

手段や方法はさまざまだが…

ある日、幻想郷の住人たちが、幻想郷から姿を消した。

彼女たちが消えた先は見渡す限りの大海原、ONE PIECEの世界だった。

目次

エリーの航海日誌

夢幻館 ↓ 無人島

1

妖夢の修行の日々

白玉楼 ↓ ???

7

小傘の大冒険

守矢神社 ↓ 孤島

18

エリーの航海日誌

夢幻館 ↓ 無人島

それはある日のこと。

突然やって来た二人組の襲撃者と幽香様。

両者の激しい戦闘により夢幻館は倒壊。

さらに何の因果か夢幻館跡地を起点に時空間が乱れ、歪み、底の見えない穴が足下に突如生まれ……
気がつけば私たち夢幻館一行は緑が覆い繁る無人島に着いていましたのです。

「幻想郷の外なのは間違いないけど、何処かしらね？」

私とくるみがイカダをせっせと作っているのを余所に、海の遥か向こうに視線を送る幽香様。

当初はそのうち幻想郷の誰かしら——例えば妖怪の賢者と謳われている八雲 紫が

来るだろうと高を括っていました。

しかし、いくら待てども助けは来ず、また人が来る気配もなく、時間だけが過ぎていき…

いい加減待つことに退屈し、嫌気が差し、この無人島から脱出することに全員一致で決定したのは当然と言えるでしょう。

少女航海中 Now Loading…

幻想郷では見られぬ大海原の光景に、幽香様も含め、私たちは感嘆の吐息を漏らしましたが…

「さすがに海ばかりじゃ…飽きるわね」

幽香様が少々疲れた口調で呟きました。

燦々と輝くお日様の下、照りつける強い日差しから同僚であるくるみを守るために彼女の頭を膝に乗せて日傘を広げて差していらつしやる幽香様。

一見、背の低い金髪の少女にしか見えなくも——彼女の正体は吸血鬼です。

創作された物語では陽を浴びると灰になってしまふ描写等があります：

彼女の場合は多少苦手としているだけであつて弱点というわけではございません。

…とはいへ、羨ましいです。

それに対して私は舟の船頭よろしく手作りのオールで舟を漕いでおります。

この扱いの差、来世は是が非でも吸血鬼になりたいものです。

「あら？…漂流者かしら？」

幽香様が目敏く何かを発見した模様です。

幽香様の視線を辿ると、そこには麦わら帽子を被った青年が小さな舟に乗っていました。

彼もこちらの存在に気づいたのでしよう。

その場で立ち上がると、両手を大きく振って大声で呼び掛けてきました。

「どのように致しましょうか?」

見ず知らずの人物に近づくときは、慎重に慎重を重ねて動くべきなのでしょうが…
この広い海原、着の身着のまま無人島に投げ出された私たちにとって情報は貴重かつ
重要なものであり必要な物。

「接触するわ。近づきなさい」

少女航海中 Now Loading…

「踏んだり蹴ったりだな、おい」

ハハハ…と陽気に笑う彼の名は「ルフィ」
何でも海賊王を目指しているとのこと。

彼の知っている知識と情報により、どうやらここは私たちの知っている世界とは別の世界……所謂、異世界に転移した模様です。

道理である八雲　紫が来ないわけです。

どれだけ離れていようとも、空間と空間を繋ぐあの能力に距離など関係ありませんので…

「壮大な迷子だな」

彼に私たちの素性を教えたところ、そのような返答が返ってきました。

なかなか適切な表現だけに反論ができないのが歯痒いです。

「それじゃ元の世界に帰れるまでの間……」

俺の仲間になれよ　！　！

にししし…と子供のように無邪気に笑いながら私たちを勧誘しました。

それが後に海賊として名を馳せるルフイと私たち夢幻館一行の出会いでした。

妖夢の修行の日々

白玉楼 ↓ ???

「ねえ、妖夢。海が見える場所で強い人と戦ってみない？」

いつものように白玉楼の庭木の剪定をしていると

やはし、いつものように幽々子様が声をかけてました。

「海、ですか…?」

幻想郷に海はないのは周知の事実。

霧の湖と呼ばれる場所がありますが、到底 “海” と呼べるほど大きくはありません。

しかし、一つだけ心当たりがあります。

私は以前、幽々子様とご一緒に “ 月 ” に行つたことがあります。
遙か上空にあるあの天体です。

そこには広大な海があり、その向こうには幽々子様のご友人である「八雲 紫」様を
打ち負かした存在がいると云われております。

もしや幽々子様が言わんとしていることは……これは何としても断りを入れるべき
でしょう。

しかし、私が口を開く前に幽々子様は――

「ちなみに貴女に拒否権はないわ♥」

可愛らしく小首を傾けつつ、両手のひらを合わせ重ね、ニコニコ笑顔でそう仰いまし
た。

「安心して妖夢、貴女一人だけに行かせるつもりはないから…」

正直、幽々子様のその発言には不安要素しか生み出しません。

「私もついていくから♥」

言い終わると同時に私の足下にあつた地面が消失し：

——ああ、これは紫様の：

暢気に私の足下に穴を作った人物を思い浮かべた瞬間、

僅かな浮遊感を身体に感じた直後、重力に従って真下へと落下を開始——

「ひいいいやあああああ~~~~~つつつつ!」

風圧で容赦なくバタバタと捲れるスカートを両手で必死に押さえつつ、

「幽々子様あ〜！ 紫様の！ これには！

こんな落ちるような感覚は！

ありませんでしたよね〜〜〜!?」

両目に涙を浮かべて情けない悲鳴を上げることしか、私にはできませんでした。

少女落下中 Now Loading…

空は雲が覆っていて薄暗く、

周囲には石造りの家が建ち並ぶ街並みだったのでしようけど…

まるで激しい戦闘があったかのように、その全てが破壊され、朽ち果て、

今は人の住めぬ廃墟と化していました。

さらに廃墟の中を縫うようにして霧が立ちこめていて視界が非常に悪いです。

幽霊とかオバケとかが出てもおかしくはない雰囲気です。

幽々子様の姿は何処にもなく、私は一人寂しくその廃墟の中に立っていました。

幽々子様の親友である紫様は空間と空間を繋いで移動する能力を持っています。私を冥界にある白玉楼から此の地に送ったのは彼女の仕業とみていいでしょう。そして幽々子様たちの性格を考えて、何処かでこちらの動きを覗き見している可能性が高いです。

おそらく今も、この状況を何処かで：

私があたふた慌てる様を思い浮かべて、ほくそ笑んでいるに違いありません。

暫く廃墟の中を探索していると周囲に蠢く気配を感じ取れました。

いきり立った巨大な猿……いえ、ヒヒの群れでしょうか……？

おそらく突然出現した私に対して警戒しているのでしよう。

ただの動物の群れでも人の手に余る脅威なのに：

ここにいるのは通常のヒヒよりも巨大で、なおかつ武器を手にしています。

何処で調達したのか、どうやって手に入れたのか、分かりませんが：

人が扱う武器を手にし、防具を身に着けている様子から、知能が高いことが伺えられます。

私は二対ある刀の一本を鞘から引き抜き、正眼に構え…

「私は冥界にある白玉楼、そこに住む剣術指南役兼庭師——魂魄 妖夢。
寄らば斬り、寄らなくとも斬る！」

言葉が通じているとは思いませんが、彼らに対してそう宣告をし、
彼らもまた私の纏う剣呑な雰囲気と構えを見て、
四方八方から武器を片手に襲い掛かってきました。

とりあえず斬ってから確かめてみましょう。

少女戦闘中 Now Loading…

死屍累々、私の周囲には息も絶え絶えのヒヒたちが倒れ伏せています。

当初は刀だけで捌いていましたが、ヒヒたちの数の多さに刀だけでは対処できなくなり……

弾の形に生成した力の塊を散弾銃のようにバラ蒔いてヒヒたちを撃ち倒したのです。

普段から幽々子様にコキ使われている——いえ、酷使されているこの身でも、この数の多さには疲労を感じざるには得ませんでした。

数が多い上に、一体一体が並の剣士、もしくはそれ以上の使い手だったのです。

正直、お祖父様から剣の手ほどきを受けていなければ、負けていたのは此方かもしれない。

「幽々子様〜！ 紫様〜！ いい加減、姿を現せてください——い！」

無駄だと知りつつも近くで暢気に見物しているであろう、お二方様に声をかけてみました。

あの人たち（？）の性格からして、その可能性が高いと思つたからです。
——かといつて、そう簡単に出てくるような方たちでもありませんが…

ザツ…

土を踏みしめる音と、段々と近づく気配に私は思わず安堵の息を漏らしました。
これでやつと冥界に帰れると、後ろを振り向いた瞬間——

「ヒューマンドリル、ここのヒヒたちを斬り伏せたのは、小娘、お前の仕業か？」

そこには幽々子様でも、ましてやご友人の紫様でもない…：背の高い男の方が一人いました。

西洋の貴族が被るような羽飾りが付いた帽子を頭の上に乗せて、

その下にある鷹のように鋭い目付きと、整った口ひげが目につきます。

そして、その人の背には彼の背丈に匹敵する十字架のような長刀を帯びていました。

否応無しに一目で “ 強者 ” と理解してしまいます。

幽々子様が仰っていた「強い人」というのは、この方なんでしょう。

どことなくお祖父様と似たような雰囲気を持つこの人に対して、私は無言でコクコクと頷くことしかできませんでした。

「約束は約束だ。お前に剣術の稽古をつけてやろう。ついて来い」

表情をほとんど変えずに一方的にそう話すと、

後ろを振り向き、スタスタと前を歩き始めました。

「ちよつと待つてくださいい！」

“ 約束 ” とか “ 剣術の稽古 ” とか、どういふこと何ですか!?

それに私、貴方のこと何一つ知らないんですけど!?

慌てて跡を追いなから、一気に捲し立てるように一気に言い放ちました。

何か私の知らないところで話が進んでいるようで、漠然とした不安しか感じません。

「——ジュラキュール・ミホーク。王下七武海の一人にして、世界最強の剣士よ?」
「ふひやあいつ!」

耳元に息がかかるほどの距離から聞こえた声に私は思わず変な声を出してしまいました。
した。

「——その世界最強の剣士が何でこんなところに……

いえ、そもそも何で私をここに送ったんですか!? 紫様!」

私の問いに答えたのは幽々子様のご友人である八雲 紫様です。

彼女は自分の能力で創ったと思われる横に細長い空間の裂け目に腰掛けて、地を滑るように空間の裂け目ごと宙に浮いたまま移動していました。

「シャンクス——彼のライバル関係にある人物が左腕を無くしてから戦う気をなくしちゃったみたいだからね……彼に提案してみたのよ?」

弟子を取って、育てみる気はない? “ 暇潰し “ ぐらいにはなるんじゃない?

……つてね?」

「そこで何で私が出てくるんですか!？」

「幽々子に話してみたら」「あら、面白そうね♥ それなら妖夢を連れていくといいわ

♥」って貴女を推してくれたのよ」

「幽々子様ああ~~~~~っ!？」

私の叫び声が廃墟に虚しく響きました。

冥界にある白玉楼には暫く帰れそうにありません。

小傘の大冒険

守矢神社 ↓ 孤島

妖怪の山にある守矢神社。

そこには「奇跡を起こす程度の能力」を持った巫女がいる……らしい。
異変で何度か会ったことがある緑髪の巫女。

霊夢にはひどい目に遭ったけど、妖怪の山の方にある神社ならひどい目に遭うことはないはず。

——と意気込んで…

「そこのお三方様！ 今こそ私の力が必要ではありませんか〜?!」

今度こそ私の持つ鍛冶技術で収入を得るべく、そう言ってみたら…

「準備はいいですか？」

それじゃ、いきますよ——！」

守矢神社の巫女——早苗がニコニコ笑顔で声をかけてくる。

石畳にペタンと座っている私を取り囲むように一人の巫女と二人の神様が立っています。

普段のふざけた雰囲気は何処へやら、厳かな佇まいに思わず喉を鳴らしてしまいました。

床に描かれた円形の魔方陣から光が漏れ出して、視界を白に染めました。

少女転送中 Now Loading...

「おおおお~~~~~っ!!!?」

気がつけば一面見渡す限り水面が広がる光景。

早苗が儀式を起こす前に説明していたことを思い出す。

『幻想郷の外にある “海” を見に行きませんか!』

鼻息を荒くしながら目を輝かせて語る早苗の姿が脳裏をよぎる。

なるほどこれが “海” というものか、幻想郷にある「霧の湖」と比べるのもおこがましくなる。

「——それで私はどうやって帰ればいいの?」

海とは反対方向にある陸地に向けて言ってみる。

そこには鬱蒼と覆い繁る緑の森だけがあり、誰もいない。

空には聞いたことのない鳥の鳴き声が木霊して、茂みの奥からは猛獣の唸り声がかこまで響く。

幻想郷の唐傘お化けである私——多々良 小傘は見知らぬ土地に飛ばされた挙げ句に、今現在進行形で迷子に……さらに命の危険に晒されています。

少女交戦中 Now Loading…

人の背丈ほどの怪鳥が飛び立ち、猛獣たちが背を向けて走り去っていきます。

獰猛そうな見た目に最初は驚きましたが……幻想郷にいる妖獣ほどの力を持っていなかったたので、私の力だけでも追っ払うことができました。やったね。

しかし、未だに迎えが来ません。

その時でした。

視界の端に青空を背景に大きな放物線を描いて何かが島に落ちました。

なんだろう…？ 気になった私はその場所へ向かうことにしました。

少女移動中 Now Loading…

おそらく頭から砂浜に突っ込んだのでしよう。

砂浜から足が生えてました。

あの高さから落ちて、よく生きてられたものです。

今もジタバタと足を動かして、もがいています。

「はいはい。今、助けますよ〜」

傘を腋に挟んで、両足を掴むと、力に任せて引き抜いてあげました。

「いやあく、どこの誰かは知らねえが……おかげで助かったぜ」

「ぎやははは」…と豪快な笑いをする赤い鼻が特徴の人物。

その人物は小さな胴体に短い手足がくっついていて変な生き物でした。

「つきやあああ——つつつ?!?!?」

あまりにも珍妙な姿に地面に叩きつけるように投げてしまいました。

件の生き物は地面にぶつかると「ぶべらっ!?!」と変な声を出しつつ顔面を地面にめり込ませ、その体勢のまま痙攣し始めました。

「てめえ、いきなし何しやがる!?!」

「ひやっ!?! ごめんなさい!?!」

さしてダメージを負っていないのか、すぐに復活してこちらを怒鳴り付ける変な生き物。

「ふん、まあいい。普段の俺なら驚きはしねえだろうが、このザマジや無理もねえか……」

アゴに手を当てて、何か結論を出してました。

この人はバギー海賊団の船長をやっている名前は「バギー」

元々こういう姿形をしているわけではなく、自由自在に体を分離できる「悪魔の実」を食べたバラバラ人間であり、海賊同士の決闘中に体のパーツを盗まれ、直後に強烈な打撃でこの島まで吹っ飛ばされた——とのこと。

「それで、そういうお前はどこの誰でどこにいるんだ？」
「えーつとですね…」

変な生き物、もといバギーに事の顛末を聞かせていると…

「ぬうわにいいいつ!? お前、妖怪だったのか!?!」

私が妖怪の一種と知ると大層驚き…

「それじゃ「八雲 紫」っていう女を知らねえか? お前と同じ妖怪という種族なんだが…」

意外な人物の名が出てきて、今度は私が驚かされました。

なんでも今の海賊団を立ち上げる前に一緒にいた船員で、神出鬼没でふらりとやって来てはいつの間にかいなくなる——そんなことを繰り返していたそうです。

私自身は「八雲 紫」の名は知っていても直接会ったことはありません。もしかして、このバギーという人間は意外とスゴいのかも知れない。

「ふむ、そういうことなら俺と一緒に来ねえか、小傘？

俺と一緒にいれば、もしかしたら紫が昔のよしみでひよっこり来るかもしれねえしな？」

今の私には幻想郷に戻る手段も手掛かりもありません。

何よりもこんな辺鄙な場所に一人でいたいとは思わない。

二つ返事で了承して、私は海賊の仲間入りをはたしました。

…といつても「海賊」というものがどんなモノなのか、いまいち分かりませんが…

「よし、小傘。お前は俺の部下と船が見つかるまでの間「バギー海賊団」の副船長に任命する。

いわゆるナンバー2ってやつを、だ。海賊団で二番目に偉い地位をお前に与えてやろ

う」

「おおおおくくくく!? ……つて、今二人しかいないんですけど?」

「そのうち元に戻って増えるんだよ!」

「ぎやははは」…と高笑い。

そして私たちはこの孤島から脱出するべく行動を起こしました。

バギー、改め船長は空を飛んでる最中にこの島の端に小屋を発見をしたそうで、そこに行けば何かしら役に立つ道具、或いは自分たちと同じく遭難した人間がいる可能性を示唆しているのです。

少女探索中 Now Loading…

永いこと雨風に晒されて倒壊寸前のボロ小屋。

とてもじゃないが人が住んでいるとは思えない。

案の定、そこには誰もおらず、あるのは朽ちた日誌が一つ。

中身を確認するためにパラパラと捲り、最後のページに書かれていたのは…

〃
〇月〇日 ミンナ、喰ワレテ、死ンダ…
〃

——という、たどたどしい文字と多数の手の跡でページが埋められていて、それを見た私たち二人は抱き合い恐怖に震えてました。

「なんかよく分からんが、ここからとつと脱出した方がよさそうだな!」

「だ、脱出するたって、どうやってですか!」

「イカダだ! イカダを作って出りゃいいんだよ!

幸いここには道具が残されている。俺とお前で作ればそんなに時間はかからねえはずだ。

ところで小傘、お前は何か得意なことはないのか?」

「え〜つと、鍛冶が得意ですよー。」

人間の鍛冶屋よりも数段上の腕前って言われているんですからー」

「マジか!」

なんか物凄く驚かせたようです。

目玉が飛び出さんばかりにこちらを凝視していました。

その迫力に思わずコクコクと頷くと…

「よっしやああつ！

鍛冶職人がいりやあ百人力、いや千人力だ！

” 善は急げ ” と言うからな、とつとつと作業を始めるぞ、小傘ア！」

イカダ作りに鍛冶は関係ないと思うけど、黙っておこう。

少女工作中 Now Loading…

簡素な作りながらも人間が二人ぐらいなら問題なく乗れるイカダが完成。
早速イカダを海面に浮かべて、大海原へと出航しました。

「うっしやあああ——！　行くぜ野郎共！」

「私は女なんですけど……」

「細かいことは気にするな！」

先ずはオルガン諸島にあるオレンジの町に向かうぞ！

そこで俺の部下どもと船に関する情報を手に入れるんだ！」

ビシツと水平線の彼方を指差す船長。

たぶん、その先に目的地があるんだろう。

幻想郷以外の方が住む場所、見たことのない知らない場所へ……

——私はそこへ向かうんだ。

そう感傷に浸っていると、私たちの背後で海面を割って何かが飛び出しました。

それは人間ほどの魚をくわえたこれまた巨大な海蛇。

そいつは捕まえた魚を頭から丸呑みすると、こちらを見つめてきました。

私たち二人はあの日誌に書かれた一文「ミンナ、喰ワレテ、死ンダ……」を思い出す。

「あの……船長……？」

「みなまで言うな」

そう言いつつオールをゆつくりと動かし…

「逃げるんだよ~~~~っ!!!」

高速でオールを漕いで、その場から離脱する。

しかし、逃げる私たちに海蛇が追いかけて始めた。

「船長！ 追っかけて来てますう~~~~っ！」

「喋ってる暇があつたら手を動かせ！ 小傘ア！」

必死になってオールで水をかく私たち。

私が船長を抱えて空を飛ばば回避できたことに気づいたのは、別の島に上陸した後でした。

こうして幻想郷の外の冒険は前途多難の幕開けで始まったのでした。